

実態に応じた手立てを準備して、授業に臨んだ事例

特別支援学校（知的障害）の生徒が居住地の中学校の音楽で合奏に取り組んだ交流及び共同学習

○概要

A生徒は、自閉症の診断を受けているB特別支援学校（知的障害）に在籍する中学部1年生である。本事例は、A生徒がC中学校で通常の学級の生徒との音楽の交流及び共同学習を行った取組である。A生徒は小学校3年生から交流及び共同学習の一環として、居住地校交流を継続して行っているが、中学校での居住地校交流は初めての経験である。保護者は地域に住む同年代の生徒たちに知ってもらいたい、楽しく交流をしてほしいと希望している。A生徒が興味をもつ音楽で交流を行うことと、特別支援学級の生徒と一緒に通常の学級での音楽に参加することを確認し、保護者から合意を得た。音楽の授業では、スケジュール表を準備し見通しがもてるようにした。また、音楽で歌う曲の歌詞付き動画を準備し、事前学習をしてから交流及び共同学習に臨んだ。演奏では、C中学校の生徒は、リコーダーを演奏するが、手指の巧緻性に困難があるA生徒は、経験したことがあるデスクベルと鍵盤ハーモニカを使用した。また、A生徒の実態に応じて楽譜を作り変えるなど、交流学級の生徒と一緒に合奏ができるように配慮した。

1. 対象生徒について

A生徒：B特別支援学校中学部1年生（知的障害）

2. 活動のねらい

A生徒は、居住地校交流は小学部3年生から行っている。保護者から、中学部でも居住地校交流を行いたい、居住地の同学年の生徒たちと交流をしながら、A生徒のことを知ってもらいたいとの希望があがった。5月末に受入れ校の特別支援教育コーディネーターと第1回目の打合せを行い、9月と12月に交流を行うことになった。主に特別支援学級の生徒と行動を共にしながら、通常の学級で音楽の授業で交流及び共同学習を計画した。また、同じ居住地の友達にA生徒のことを知ってもらいたいという申出に対して、A生徒の自己紹介や交流の予告などを掲示する居住地校交流ボードを受入れ校に渡し、同級生の目に触れる場所に掲示してもらうことにした。

3. 事前の取組と配慮

昨年度末の希望調査の段階で、保護者より中学部に進学しても居住地校交流を行いたいとの申出があった。このことを受け、5月の家庭訪問で保護者と話し合いをしたと

最初のうちは周りの生徒の様子を見ているだけだったが、小グループに分かれてのパート練習が始まると、声を出して一緒に歌い始める様子が見られた。事前に動画を見たりA生徒用の楽譜を用意して練習したりしたことで、見通しをもって取り組むことができたものと思われる。

また、合奏で演奏した「かっこう」という曲は、B特別支援学校での学習発表会でも鍵盤ハーモニカで演奏した経験があり、自信をもって取り組むことができた。中学1年生の音楽では、この時期、アルトリコーダーの使い始めに当たり、「かっこう」などのやさしい練習曲が題材になっており、A生徒にとって親しみやすいものであった。A生徒はリコーダーでの演奏は難しいが、実態に応じて鍵盤ハーモニカやデスクベルを使うことで一緒に演奏することができた。特に、アルトリコーダーが下のパートを演奏するときは、デスクベルのメロディーがよく響き、きれいな合奏となった。音楽の教科担任にも褒められ、達成感を味わうことができた。

また、居住地校交流が始まる前に、C中学校の1年生が通る廊下に居住地校交流ボードを設置し、A生徒の自己紹介カードやメッセージ、作品などを掲示して間接交流を行ったところ、交流学級以外の生徒にもA生徒のことを知ってもらうことができた。A生徒が来校すると、通りすがりに「Aさんこんにちは。元気？」などと言葉を掛けてくれる生徒もいたことから、居住地校交流ボードを使った間接交流は、C中学校の生徒や教員がA生徒に対する理解を深めるために有効な手段だったと言える。

毎回の居住地校交流に担任間で評価と次回の活動計画について話し合い、児童生徒の活動の様子や反省を共通理解し、居住地校交流の記録を作成することで、個に応じた指導ができるようにしていった。

5. 事後の取組、今後の課題

中学校との居住地校交流においては、特別支援教育コーディネーターと交流学級担任、教科担任が別であるということと、部活動や行事などで多忙であるという実態から、事前の打合せや準備の時間を十分に取ることが難しいという課題がある。C中学校との交流においても、このような事情から事前の打合せを十分に行うことができず、同学年の生徒たちと関わる時間を授業の中に盛り込むことが難しかった。受入れ校側の窓口を一本化し、まず、特別支援学校生徒担任と受入れ校担当が打合せをし、次に、その内容について受入れ校の中で共通理解を図るという流れをつくる必要があると思われる。

また、各教科での交流については、特別支援学校生徒の実態から活動内容が限られてしまうという課題がある。そのため、各教科で交流及び共同学習を行うケースが非常に少ない。特別支援学校の教員と受入れ校の教員が、特別支援学校の生徒に合った学習内容の設定や授業の中での関わりのもたせ方などを話し合い、意見を出し合うことで、より様々な活動が展開できるものと思われる。